書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

増補新版

イスラームの構造

タウヒード・シャリーア・ウンマ

黒田壽郎 著

書肆心水

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

Toshio KURODA

THE STRUCTURE OF ISLAM

Tawḥīd, Sharīʿah, and ʾUmmah

© 2004, 2016

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

イスラームの構造　目次

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

序章
イスラームの三極構造……18
——タウヒード・シャリーア・ウンマの有機的連関
タウヒード 21
シャリーア 23
ウンマ 26
聖典クルアーン 29
イスラーム社会形成の歴史……34
預言者ムハンマドと正統カリフの時代 34
ウマイヤ朝・アッバース朝の時代 37
為政者とシャリーア 40
近現代とシャリーア 43
第一章 タウヒード イスラームの世界観
タウヒードとは何か……49
等位性、差異性、関係性の三幅対 49
権威主義の否定と水平的構造 51

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

六信五行　52
クルアーンとスンナ　54
タウヒードの言語学的原義　57

等位性……60
ユダヤ教との比較　61
キリスト教（精神・物質二元論）との比較　65
道徳論ではなく存在論としての平等　68

差異性……71
カラーム神学の原子論　71
モッラー・サドラーの〈存在の優先性〉論　74
同一律の忌避　77
差異性のもつ政治的側面　79
差異性のもつ経済的側面　82

関係性……85
アラベスク模様の思想性　89
人間関係と男女の関係　94
家族と親子の関係　99
スピノザ哲学とイスラーム　103

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

個人の優先性 110

第二章　シャリーア　イスラームの倫理と法

シャリーアとは何か ……116
シャリーアの二重構造――意識にとってのシャリーア、公的次元のシャリーア 118
イスラーム法の史的厚み 122
シャリーアの成立と展開過程 126
開かれたシステム 132
善悪の五つの範疇（義務、推奨、無記、忌避、禁止） 135

五行（宗教的義務（イバーダート）） ……137
信仰告白と礼拝 138
断食 144
喜捨 146
巡礼 156

社会関係法と私的関係法 ……166
社会関係法（ムアーマラート） 167
私的関係法（アフワール・シャフスィーヤ） 171
女性の権利と男女の平等観 176

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

遺産相続のシステム　183
刑　罰　185
法で語り尽くしえないもの　187

第三章　ウンマ　イスラーム共同体

ウンマとは何か……196
現実のウンマと理想のウンマ　197
文明の状態を映すスクリーン　199
ウンマ誕生の背景——ジャーヒリーヤ（無明）時代の状況　202
理想のウンマ——預言者と正統カリフの時代……208
民衆とカリフの関係性　212
〈原理主義〉と〈原点回帰主義〉　217
理想のイスラーム共同体を挟む二つの反面教師的歴史　232
ウンマの多層性　224
民衆の優位性　226
国家の時代におけるウンマ……229
為政者とウンマ　229
国家権力とウンマ——アッバース朝以降　236

SAMPLE
Shoshi Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

権威と権力の相違に基づく社会構造の二層化　242
イスラームの都市空間……245
差異の思想と都市のかたち――中庭式住宅と蜂の巣状の町　245
四つのタワーイフ――都市をつくる社会的ネットワーク　249
スーク（市場（バザール））　254

終章

西欧化とイスラーム世界　272
イスラーム世界の自己主張　278
資本主義に抗する社会　280
現代中東世界と世界史　288
世界史の今を映す鏡、パレスティナ　298

附録（インタビュー）

イスラーム研究の道程　308
多元的文化への偏見のない関心――井筒俊彦を引き継ぐために（聞き手・湯川武）　325
初版あとがき　356
増補新版あとがき　361
索引　380

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

増補新版

イスラームの構造

タウヒード・シャリーア・ウンマ

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

本書は二〇〇四年刊行の初版に、インタビュー「多元的文化への偏見のない関心」、増補新版へのあとがきを加え、索引項目を増補改訂し、初版の字句に若干の修正を施した新版である。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

序章

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

近来さまざまな観点からイスラーム、ないしはイスラーム世界にたいする関心が高まっている。それまで一つのブロックとして認識されてこなかった中東、イスラーム世界が、一つのまとまりとして意識されるようになったのはごく最近のことであり、それはおそらく外部の観察者の目には極めて衝撃的であった、イラン・イスラーム革命を契機としているであろう。西はモロッコから東はインドネシアにまで拡がるイスラーム世界には、現在でも十数億のムスリム（イスラーム教徒）が存在しているといわれている。彼らの存在はこれまで、国際政治の舞台で大きな役割を果たすことがなかったため、ほとんど無視されてきたが、状況が様変わりを示したのがイランにおける政治的変化である。この変化は、政教分離、脱宗教、合理的精神に立脚する民主的統治の充実といった、現代の政治的発展のための図式に反するものとして、一般に〈中世帰り〉の、時代錯誤の代物と評価され、現在も基本的にそのように評価され続けている。民主主義的資本主義、ならびに社会主義といった現代の二つの政治的潮流の、いずれにも属さないこのイスラーム革命の路線は、政教分離、脱宗教という観点からみて、現代の政治的潮流に根底から逆らうものであり、先ずはこの点から人々の強い拒絶反応の対象となっている。

ところで肝心なイスラーム、ないしはイスラーム世界の問題であるが、過去において高度な文化的水準を保った事実については、人々の間で若干認知されてはいたものの、この世界の近現代における衰退は著しく、とりわけ西欧による植民地支配の後には、国際的舞台においてほとんど発言権を持ち合わせなかったため、長らく積極的な知的関心の外に置かれてきた。したがってイスラームという教え、その信者たちが多数派を占めるイスラーム世界に関しては、人々は常識の次元で充分な知識を持ち合わせていなかったというのが実情である。この点は長い研究の伝統をもつ欧米においても、大差はないといいうるであろう。この教え、世界についての、細部にわたる諸事情に関して、専門家たちの間には精密な

SAMPLE
Shosin-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

情報が獲得され、蓄積されつつあるものの、この異質の文明をめぐる大枠の認識については、人々の自文化中心主義が突出して全体的な構図を読み損なっているという、基本的な問題を抱えている点は否み難い。この自文化中心主義は、文化的多元性について一般に意識の低い西欧世界の、例えばオスマン朝敵視、蔑視の尾を引いて、一般大衆の常識の次元で著しいのである。

このような状況の中でイスラーム、ないしはイスラーム世界について言及することには、多くの困難が存在する。とりわけこの世界ではイスラームを信ずる者が圧倒的多数であるにもかかわらず、国政レヴェルではイスラームの路線を採る国は比較的少ない。アラブ社会主義、バアス主義等イスラームとは異なる原則で政治が行なわれている改革派の国々があり、最も多数のムスリムを抱えるといわれるインドネシアにおいても、国法をイスラーム化しようと試みる党派は依然として少数派であるといった有り様である。イスラームを国是とする国々としては、サウディアラビアやモロッコといった王制の諸国が挙げられるが、二十一世紀に及んでなお権威主義的なこの制度にたいする固執は、流石に諸隣国の民衆には人気がない。ことほど左様に登場当初は中央アジアからスペインまでを統べる大帝国を築き上げ、それを長らく運営した歴史を持つイスラームの政治的力は、まさに風前の灯火といった状態にあったのである。こと政治的局面に関しては、この世界はイスラーム的とはもはや呼びえないような、四分五裂の有り様であった。外部の観察者が、イスラームはすでに過去のものと判断するのも、故なしとしなかったのである。

そのような情勢の下で突然のように発生したのが、イラン・イスラーム共和国の誕生（一九七九年）である。この革命が外部の世界に及ぼした衝撃はもちろんであるが、それはとりわけイスラーム世界に大きな影響を及ぼさずにはいなかった。この事件が民衆に及ぼす波及力には著しいものがあり、それを押

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

さえ込むためにさまざまな国際的力学が働き、八年にわたったイラン・イラク戦争の結果、現在ではその影響力はかなりの程度封じ込められている。しかし共通の宗教的、文化的伝統を持つこの世界において、イスラームの伝播力は伝導的ではなく、輻射的に作用する。熱源は、地を這うようにではなく、空間を飛び越すようにエネルギーを移動させる。この間にかなり成功し、安定した社会主義を誇るアルジェリアで、強力なイスラーム政党が躍進し、その結果国内で深刻な政治闘争が展開されてきた。その他各地でイスラームへの回帰の波が巻き起こったが、特筆すべきはトルコの最近の変化であろう。第一次大戦の敗北以後トルコは、ケマル・アタチュルクの手によって逸早く脱宗教化の路線をとり、ほぼ一世紀にわたってこの道を突き進んできたが、最近の総選挙によってイスラーム政党が大勝するという番狂わせが生じているのである。この国を取り巻く微妙な国際関係、軍部と深いつながりを持つ旧勢力との関わりで、この国のイスラーム化の行く手には今なお多くの難題があり、その将来は依然として未知数である。しかしこれまで百年に近く圧倒的な力を誇っていた世俗主義の政党が、総選挙において惨敗している事実は、この国でも確実に何事かが進行していることを示すものであろう。

ありそうでなさそうであり、同時になさそうでありそうでもあるイスラームの力を分析し、この世界の将来を予測するためには、政治的な現象面にのみ配慮するばかりでは充分ではない。やはりこの教えの本性そのものと、その文化的、社会的な機能について検討を行なうことが不可欠なのである。すでに指摘したように、政治的側面におけるイスラームの力はすでに退化していることは明らかであるが、その衰退と反比例して国家レヴェルのすぐ下では、イスラーム性はむしろ次第に強化されつつあるのである。この世界における上部構造の退嬰と、下部構造の強化は、現在のこの世界に認められる顕著な特徴であるが、このような事態の解明のためにも先ず質(ただ)さなければならないのは、これまでもっぱら細部に

SAMPLE
Shosha-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

拘泥する専門家たちの多くが不問に付してきたが、一般の人々にとって最も大きな関心事である、次のような初歩的な問いである。「世俗化の潮流が一般的である現在に至ってもなお、人々の心を惹き付けてやまないイスラームの魅力とは何か」。

七世紀の前半にアラビア半島の一角で誕生し、その後瞬くうちに勢力を広め、十四世紀の長きにわたって信徒の数を増やし続け、現在においてもなお十数億の信者を持つといわれるこの教えは、改宗者の数が少ないことで知られている。世界史の中には、短期間に行なわれた勢力拡張のケースとして、アレクサンダー大王の東征、モンゴルの拡張等、例が多い。しかしいずれの場合も、中央の力の凋落に伴って、すぐにその勢いは衰退している。ただしイスラームの拡大の場合は、その限りではないのである。登場当初のエネルギーが漲(みなぎ)った状態における、教勢の拡大、維持については論外であるが、その後の著しい衰退の状況において、宗旨変えを試みる人間が続出したとしてもなんの不思議もない。事実西欧の植民地主義者たちは、この世界の衰退は民衆が、この愚昧な教えを性懲りもなく信奉している故であると、声高に繰り返し述べ立てたものである。しかしその反面この世界をよく知っていた著名な高等弁務官は、彼らがこの奇妙な書物を信奉している限り、われわれには為(な)す術がないと告白しているのである。この奇妙な書物とは、イスラーム独自の聖典であるクルアーン（コーラン）に他ならないが、この教えを信ずる、つまりムスリムとなる、ないしはムスリムであるということは、とりもなおさずこの啓典を生きるための導きの書とすることに他ならない。ところでこの書物には、時代の変遷を通じて変わることなく人の心を打ってやまない、どのような衝迫力があるのであろうか。

イスラーム、及びイスラーム世界の研究の伝統が浅いわが国においても、われわれが問題とする主題についての関心が高まって以来、数多くの著作、論考が出版されている。それらの研究の中には、すで

SAMPLE
Shoshi Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

に上述の問いの解答になるような事柄が多く散見されるが、本書はもっぱらこの問題に論議を集中して分析を進めていくことにする。筆者は長らく多くの人々から、この点を明快に説明する研究書の紹介を求められてきたが、なかなかそれに相応しい著作を見つけ出すことができなかった。それには多くの理由が挙げられる。この教えが対象としている事柄がきわめて広範、多岐にわたっており、同時にそれを受け入れたムスリムの対応も複雑、多様であり、なかなか核心を突いた論議が行なわれ難いという、対象の広がりそのものにも原因がある。しかしそれ以上に問題なのは在来の研究が、この教えの核心部分について充分な検討を行なっておらず、その成果が不十分である点であろう。本書はそのような欠陥を補うために、この核心部分に焦点を当て、それをまったく新しい視角から解明する試みである。それに先立ってここでは、既存の研究の問題点を指摘しながら、この試みの概要を簡単に説明しておくことにする。

これまで〈イスラーム〉というタイトルを冠しながら、その実ほとんどイスラームについて論じていないような著作が数多い中で、あたら限り問題の核心に迫る議論を展開するつもりであるが、それに際して先ず冒頭からイスラーム理解の中核部分の構成について紹介しておくことにする。よろず物事には根幹に当たる部分と、そこから派生する枝葉の部分があるが、イスラーム論議の多くが、枝葉の部分の説明に労を割き、その間に焦点を見失ってしまう傾向があるため、本書では先ず事の根幹についての概略の説明から始めることとする。

イスラームの三極構造——タウヒード・シャリーア・ウンマの有機的連関

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

天啓の書クルアーンを基軸にするイスラームの教えは、基本的に三つの柱、ないしは極からなり立っている。筆者がイスラームの三極構造と呼ぶこの教えの基本構造は、以下に指摘するような三つの極からなっている。つまり(1)固有な世界観である〈タウヒード〉、(2)行動の規範となる〈シャリーア〉、(3)共同体のありようを示す〈ウンマ〉の三つであり、イスラームの特性はこれらの三つの極が作り出す磁場において生み出され、そのような場において機能するといえる。そのさい重要な点は、一々の極についての正確な認識もさることながら、それぞれの極が発する磁性が他の極の発するそれと交感、反応し合う関わりについての認識である。この点の詳細については後の本文において、それぞれの極に関して独立した章を設けて論述するので、それに当たって頂くとして、要はここで挙げられたそれぞれの極は、単独にそれだけで捉えられるのではなく、他との関連において理解されねばならないということである。ところで既存の研究が抱えている問題は、イスラームの基本的認識に不可欠なこの三極構造を形作る一々の部分について充分、かつ正確な分析を行なってこなかったばかりではなく、さらにそれらが互いに関連し合いながら機能する、綜合的な働きについて検討することを怠ってきた点にある。複雑、多岐にわたっているが、同時にきわめて統合的な性格の強いこの教えの、最も肝要な部分が蔑ろにされたままでは、その本性の理解はしょせん不可能であるが、以下にそのような不備の実態を明らかにして、読者の便に供することとする。イスラーム、ひいてはイスラーム世界に関する言説には、重大な欠陥、ないしは欠損が存在している訳だが、その内実を予め検討しておくことは、読者の理解にとってきわめて重要であろう。とりわけこの種の欠損がたまたまの失敗、不注意の結果ではなく、ある種の一貫した意図によって生み出された気配が濃厚であるため、欠損の実情を検討しておくことは、なおさら重要なのである。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

イスラーム、あるいはイスラーム世界をめぐる言説の顕著な偏向性についてはすでに、E・サイードが『オリエンタリズム』や『イスラーム報道』といった著作において優れた指摘を行なっている。とりわけ彼は『オリエンタリズム』において、現代西欧の作家、芸術家たちが描いてきたオリエント、つまり中東世界の現実が、いかに仮想のものであるかを摘出し、彼らの言説の組織的な虚構性を暴き出している。この種の言説の体系が成立するためには、その背後に一貫した態度、姿勢が存在しなければならないが、それをサイードの言葉を借りて一言で要約すれば、「対象の存在をその不在で説明する」という手法である。具体的な現実から遊離した、ロマンティシズム、エクゾティシズムの衣を纏った視線は、対象の〈不在〉をもって実在めかしたものに飾り立てる。これが完全にフィクションの世界に留まっている限りにおいては、さして問題ではない。しかしそれを通じて現実のありようが忖度された場合、もたらされる誤差は深刻なものである。ところでサイードが炙り出したのは現代西欧の著述家たちの言説の虚構性であったが、これと同じ事態は、西欧の学術研究の場合にも形を変えて存在しているのである。この場合の基本的な手法も、上述したような「存在を不在で説明する」という姿勢と共通しているが、より具体的にいうならば対象の存在を、核心的な部分を省略したまま説明する姿勢と要約することができるであろうか。あらゆる対象は、それを構成する多くの部分を持っている。例えば百の構成要素があるとする場合、九十五の要素を客観的に取り上げ、残りの五つの部分を省略、ないしは変形して説明するのである。この場合九十五という大きな部分についての正しさのゆえに、一般の人々は論述に疑いの目を向けぬようになり、それに乗じて付け加えられる五つの省略、変形に誑かされてしまうことになる。省略、変形された部分が核心的であればあるだけ、もたらされる誤差は大きいのである。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

タウヒード

三極構造のそれぞれの極は、イスラームの理解に当たっての最も中核的な部分であるが、省略の具体的な一例として最初に挙げられるのは、イスラームの基本的な世界観である〈タウヒード〉の軽視である。この世界ではしばしば、「イスラームとはタウヒードの教えである」という指摘がなされており、ここにこそイスラームのイスラームたる所以（ゆえん）があるといわれている。事実これはイスラームそのものの本性を知るためだけではなく、姉妹宗教であるユダヤ教、キリスト教とこの教えの主張の相違を明らかにするためにも、絶対に避けて通ることのできない主題である。しかしこの問題は、とりわけ欧米の研究者の間では、ほぼ意識的に回避されているのである。核心部分についての考察を欠いた説明に、ことの実質に迫る成果が期待されるはずがないことは明らかであろう。このような無視の背景には恐らく、後に指摘するように、この問題に関する言及が、研究者たち自身の側の宗教的立場に差し障りをもたらし兼ねないという、特殊な危惧があることも想定される。姉妹啓示宗教の最終版であるイスラームの世界観は、当然先行する諸宗教に対抗しうるだけの、積極的な主張を備え持っている。不用意にこの問題に立ち入ることは、自分たちの宗教的立場を損ない兼ねない危険性を孕んでいるのである。

本文においてその内容を詳しく論ずるが、タウヒードとはさまざまな事象を〈一〉を介して理解する原則であり、〈一化の原理〉と訳されるものである。この原理を神に適用すれば一なる神という、唯一神論の基礎がえられる。ただしこの原理は、固有なかたちで現実世界のありようにも適用される。この原理を厳密に適用した場合、例えばキリスト教の三位一体の議論は基本的な矛盾に曝されるのである。タウヒードの論理からすれば、地上に存在するものみなは自らの外に存在の原因を持ち、自らの外に存在因を持つものは、神の被造物としてすべて生成消滅するという点で共通している。すべての存在者はそ

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

附録（インタビュー）

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

イスラーム研究の道程

戦後体験とフランス文学研究

一九三三年生まれのわたしにとって、知的な経歴と戦後の体験とは切り離せないものです。敗戦を小学六年で迎えましたが、敗戦は日本の大きな分岐点であって、それまでの伝統的な日本に外国の生き様のようなものが入ってきたわけです。そういうところで、生きる形の激変を直に、廃墟のなかの体験として生きまして、自分のアイデンティティに対する疑念のようなものを非常に強く感じるようになりました。それまでの軍国主義の風潮が、ある時ぱかっとなくなったわけで、非常に爽快感があり、暗い過去をふっきっての明るい展望が開けてきたのと同時に、自分自身が何なのかということに深い疑問を持ちつづける日々を送りました。そういう言わば空白のようなものに対して最も頼りになるのは文学であるとわたしは思います。一口に文学と言っても、近頃の文学には共感を覚えるものがまずないのですが、少年・青年時代のわたしにとって文学というのは、自分の生き様を全体的に確かめるためのよすがとして、なくてはならないものでした。さまざまな文学作品を読み漁りました。はっきり言えることは、日本の文学にはまったく興味を抱くことがなくて、フランスの近現代の小説なり詩なりに非常にひかれました。大学の学部時代にはアンドレ・マルローに関して論文を書き、大学院でもフランス文学を専攻し、

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

フローベールの文体論をやりました。それは、自分の生き様と現実というものが何を媒介としてどういう接点を持ちうるのかということを考えることであったように思います。マルローは周知のように一種の人間の生き様と生の意味を究明していましたし、フローベールの場合はものを書くということ、つまり文体をもっていかに現実の生を語りうるかということを非常に真剣に考えた人です。そういう意味で、行動なり表現と、リアリティーといったものの接点を探ることをやったのです。

しかし何年かやっているうちに、いかにフランスの文学が素晴らしいものであり、自分にとって啓示的であったとしても、自分の本当の心の系譜とはどこか違うのではないかという思いがあり、そこで自分たちの文化的なバックボーンについて考え始めました。よく言われるように日本人は多元的な精神性を持っていて、過去に神道、仏教、儒教があったといっても、そういうものとの関わりだけを論じてみても、現在の自分は語り尽くせないところがあります。また、欧米のことをやっていればそれで世界が分かるし日本の問題も解決できるという考え方が戦後数十年は強かったのですが、そういう欧米中心主義のようなものには非常に違和感がありました。

わたしなどは恐らくそういうものを徹底的に懐疑してみようという、戦後最初の世代ではないかと思います。欧米の精神文化には非常にひかれましたが、それをどこかで一度対象化、客観化して捉えなおす必要があるのではないかと感じ始め、これは大学でフローベールの文体論などをやりながらある種到達したともいえる境地でした。フローベールはあれほど見事な文体を実践しましたが、およそ三十年がかりの、三つのヴァージョンをもった、言わば奇妙奇天烈な文体をもつ『聖アントワーヌの誘惑』がそうであるように、一作書くごとに、自分の業績を打ち壊すような作品を書いています。フローベールが自分の文体に対して本質的な疑問を持つというそのあり方が、自分のアイデンティティー理解と重なっ

SAMPLE
Shoshi Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

たように感じました。わたし自身の西洋文化、西洋文学に対する志向のようなものを相対化する契機となったのです。そういう意味で今でもフローベールには感謝しています。フローベールを嫌う人も多いでしょうが、フローベールの批評精神が教えてくれたものは大きかったと思います。当時のわたしはフランス文学の専門家になろうと思っていたところがありました。慶應大学での先生は佐藤朔さんで、その先生からも慶應大学に残ってフランス文学を教えなさいとお誘いを受けたことがありました。しかし結局その道に進むことは選ばずに、当時慶應大学にいらした井筒俊彦先生につくことにして大学院の専攻を変えました。

井筒先生の魅力は世界の文化・文明というものを非常に多元的に捉えていることにありました。周知のように大変な語学の天才でした。さまざまな語学をやりながらさまざまな文明について等分の視線を注ぐ井筒先生のものの見方にとても強くひかれ、わけもわからぬままに、井筒先生の「アラビア語でもやってみたらどうか」というご示唆に従ってアラビア語の世界に入りました。これがわたしのアラビア世界、中東世界研究の始まりです。しかし先生がやったらどうかとおっしゃったから始めたというだけではなく、当時の自分の専門をもう少し客体化・相対化するという動機もありました。また、自分自身の日本人性のようなものを確認するためには、そういう手続きを経ることも必要だろうという考えもありました。制度的に言えば、フランス文学でマスターコースをとったうえに、またもう一つマスターコースをとり直して、井筒先生についてアラビア語を勉強したということになります。

なぜ当時のわたしにとって他ならぬアラビア文化であったのか。先に述べましたように西欧を相対化したかったと同時に、日本人性も相対化したかったのです。ならば、中国とかインドとか色々ありますが、これらは遠いようで近いようなところがあって、西欧と自分の相対化を考えていた自分としては、

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

いっそのこと全然見慣れていない文化・文明、こちらを本当に相対化してくれるであろう未知の文明、アラブ・中東世界のほうに飛び込もうというわけでした。

井筒俊彦門下と中東留学——アラビア語の習得

わたしが中東・イスラーム研究の世界に入った当時は、今とはまったく研究環境が違いました。アラビア語の講座もなくて、例外的に大阪外語大学に語学学校のような形で講座があるだけでしたので、どこに籍を置くかということで大変苦労しました。井筒先生の肝煎で、絹の道の向こうに研究対象そのものの中東世界があるのだからということで、さしあたり東洋史に在籍させていただきました。およそこういう次第でアラブ研究を始めました。

ところが井筒先生はわたしが転科したその年にカナダのマックギル大学に呼ばれてしまいまして、転科はしたもののすぐに先生がいなくなってしまったのです。それで大変苦労しました。しかたがないので、日本・エジプトの文化交流の一環としてのエジプト留学生の試験を受けまして、カイロ大学に大学院生として入学しました。アラビア語は非常に難しい言語でして、勉強し始めて一年や二年ではどうにもならない。ひと月の間文法を井筒先生に習いまして、あと二、三か月アラビア語の詩を習いました。しかし井筒先生がカナダにお出かけになってしまったので一人で学習を進め、その後一、二年で向こうへ行ったものですから、アラビア語が満足にできるはずもない。そうした事情もあったので、専門はアラビアの文化や伝統を学ぶうえで比較的入りやすい歴史学・イスラーム史を選択しました。

向こうには、歴史研究もある種の伝統、前提がありました。正統四代カリフだとかウマイヤ朝だとかやるわけですが、向こうでは正統四代カリフというものが批判の余地のない理想的な時代だとされてい

SAMPLE
Shoshi Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

て、現地の人々はそれをあまり批判的には見ない。「預言者世にいれられず」とは日本などでよく言われることわざですが、イスラームの場合はまさに世にいれられた預言者なのであって、しかも、アラビア半島の一角で立てた教えが瞬くうちに広がって、百年たたずに大帝国を作ってしまう。

イスラーム世界におけるイスラームを見るうえでは、建設的な要素と破滅的な要素の二つを見ていかなければならないと思いますが、イスラームというのは、周知のように今でも十数億の信者がいます。それだけの持続性と発展性があります。と同時に、かつては光そのものであったイスラームが、歴史の流れと共に退嬰的になってゆく、そのいわゆる没落過程も明らかであり、結局それがいつどういうかたちで始まったのかということが、どうしても究めてみなければいけない一つの仕事なのです。

エジプト留学では、ハワーリジュ派というイスラーム世界で初めて出てきたいわゆる反体制の派を研究の主題にしました。わたしにとっては大変なことでもあり、同時に興味深かったことでもありましたが、イスラーム世界でハワーリジュ派を研究対象にすることは憚られることなのです。反体制派ですから。この反体制派の詩人たちのアンソロジーのようなものがあります。それを分析し、またその詩の背後にある歴史的状況なり思想的神学的状況も調べるという方法で「ハワーリジュ派の詩の分析」をやりました。そのためには歴史も学ばなければならないし、神学もやらなければならない。さらに法学と政治論も関わってきます。この主題に取り組んでみてわかったのは、イスラーム研究は、単に宗教としてのイスラームとかイスラームの神学とかイスラームの法学とかを個別的にやっていただけではまったくその姿をつかむことはできず、それらが密接に組み合わされて全てが動いているということでした。

イスラーム性のネットワークがいかに働いていて、どういう破綻が生じるとどういう問題が起きるのか、つまりイスラームの力そのものの構成と発展、そして分解過程というものが、イスラーム最初の分

SAMPLE
Shoshin-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

派であるハワーリジュ派、一番最初のケースであるハワーリジュ派をめぐる状況からよく見えてきます。正統四代カリフ時代という最も高度にイスラーム性が発揮された時代に起こった反体制運動ですから、実によくその辺の機微がわかるのです。これを専ら研究致しましてドクター論文を仕上げました。単行本としてはだいぶあとになってから、これをベースに『イスラームの反体制』として発表しました。

イスラーム研究というものにはさまざまな専門があります。例えば歴史研究なら、正統四代カリフの時代からウマイヤ朝にかけてのものとか、アッバース朝の歴史を見るとか、現代を分析するとか、こうしたさまざまなものがありますが、わたしは綜合的・複合的な相手を研究するにあたって、どこか一つに対象を限定するということはできませんでした。専門家としては対象を一つに限定してやっていたほうが成果を早くあげられるのですが、それではイスラームの本質は分からないと思い、あえてそういう道は選びませんでした。

イスラーム哲学・思想

そうした考えで次に着手したのは、哲学・思想関係でした。ハワーリジュ派というのは信仰と行為の関係について、信仰は信仰だけで完結するのか、行為がなくては信仰は成り立たないのではないかという大きな問題を投げかけた流派でした。それは当然イスラームの中で新しい神学論争を呼び起こしました。それゆえこれは「神学の始まり」と呼ばれています。

イスラームにはカラーム系、つまりイスラーム固有の哲学・思想派と、ファルサファ系、これは実際のところは複雑なのですが、簡単に言えばギリシャ哲学的なものを受け継いだもの、この二つの流れがあります。わたしは個人的に言えばカラーム神学の、とくに原子論のようなものに興味を持ちました。

SAMPLE
ShoshiShinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

これは業績をあげるにはなかなか難しいもので、その間、井筒先生の示唆もあり、先ずはガザーリーの『哲学者の意図』の翻訳に取り組みました。関連する研究書も少ないなかで、初めて日本語に翻訳するのはなかなか骨が折れました。この本はガザーリーというカラーム系の思想家がファルサファ系の考え方を積極的に取り込もうとして書いた、ファルサファ系の哲学の要約、概論のようなものです。それと同時にイスラームの哲学の流れを概観したアンリ・コルバンの大変有名な『イスラーム哲学史』も翻訳しました。

しかし哲学の流れだけを追いかけていっても、イスラーム文化全体の把握にはうまくつながらないようなところがあります。イスラーム文化はその構造が実に複雑なのですが、専門家はきちんと分を知っていて、その複雑な構造のほんの一部しか口にしません。そういうわけで、本当のところは、その専門家が言っているところと、その原構造あるいは大きな構造というものを照らし合わせながら見ていかなければならない。結局イスラーム文化・文明というのは外部の人にはわかりづらいのですが、そこに参加している人たちが口にしないながらもお互いに共通して持っているものが非常に大きいのです。ところが専門家は、自分の専門の問題だけに関して議論を発展させるようなところがありますから、哲学の問題にしても神学の問題にしても、特定の哲学者がこう言ったからどうだというだけではなく、それを今一度大きな枠組みの中に落とし込むような理解の仕方が必要なのです。このような考えがあったので、ある哲学者個人について大きな本を書くという仕事はしませんでした。

カザーリーを中心としてそれ以前、つまり初期カラーム神学の考え方とか、ガザーリー以降、これは井筒先生が発展させているのですけれども、モッラー・サドラーとか、そのへんについて、それらを貫通するような関心を持ちたいと思っていますが、これは一人ではなかなか大変な仕事です。概観をなぞ

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

ることしかできませんが、時と関心の赴くところに従って色々と研究は続けています。

シャリーア研究

これら哲学の研究と同時に、シャリーアについても多角的に見ていこうとしました。シャリーアとは「水場への道」という意味ですが、この考え方はイスラームの登場当初からあり、それ以後もあり続けるものです。ただしそれが体系化されていくのには結構時間がかかっていて、何が体系化されてゆくかにはその時々のイスラームの歴史的状況がずいぶん影響しています。イスラームの力が強い場合には政治論のようなものもシャリーアのなかに色濃く織り込まれますが、イスラームの政治性が傾いてくると、むしろ生活に関係のある部分に細かな注釈がつけられるといった事情があります。伝統的なシャリーア理解はこうした広い視野によるものではなくて、形成されたもの、既存のものは尊重するが、それ以外のもの（言わばシャリーアの運用過程、人々がシャリーアをどう生きたのかということ）は尊重しないような議論に傾いたもので、ぶつ切りの専門タコ壺化した、分断的で孤立的な研究です。わたしはシャリーアの理解は、政治の情勢も勘案した統合的なものであるべきだと考えています。政治論も入ってきますし、もちろん実定法的なものも国際法的なもの（シャル）も入ってきます。そのように大きくとらえたうえで、ある特定の時代・地方ではどのような要素が特に、またどういうかたちで当時の社会に影響を与えたか、そういう分析をしていくべきだと思います。

シャルはいわゆる国際法にあたるものです。これはオスマン朝の外交政策にもある意味で強い影響を与えたものですが、そういう事情に関する研究はほとんど目にしたことがありません。イスラーム世界の有為転変、毀誉褒貶とともにその重要性は流動しますが、そういうものは確かに存在していました。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

法の問題は、現存する法体系について精密に調べていくこともありますし、欠けている法や法意識を復元させるといった研究の方法もあると思いますが、今のところしなければならないのは、そうした法意識なり具体的な法の総体が、歴史社会の発展に具体的にどれほどの影響を与えたかを検証していくことでしょう。

イスラーム経済研究

法学的要素が政治と社会にどのような影響を与えてきたかということを、どこかの時代できちんと考えてみる必要があるという考えから、ここ十年ほどは、そのひとつの道筋としてイスラーム経済論に取り組んできました。

イスラーム経済はこれまで「そのようなものはない」と言われてきていたものです。イスラーム経済論は法学の一分野に入りますが、法学全体が、オリエンタリズムにおいては「机上の空論であって現実の文化・社会的な次元では何の役割も果たしていない」とされていましたので、そんなことはないということを実証する試みに取り組んでいます。「イジュティハード（法的解釈）の門は閉ざされた」、つまりイスラーム法はある時代から時代状況を踏まえた柔軟な発展をしなくなったと、ある時代に言われて、それ以降イスラーム法に属するものは全て具体的な政治世界では何の役割も果たさなくなったというようなことが定説になっていました。そのためにその方面の研究は全く行なわれてこなかったのです。しかしそれに対する問題提起は欧米でも始まっています。この十年、二十年のことですが。

それまでわたしはどちらかというと哲学とか法学とかいったものを理論的にやってきましたが、今は理論的・観念的なものが具体的な中東・イスラーム世界にどのような伝統的な足跡を残しているかとい

SAMPLE
Shosh-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

うことを検証するために、イスラーム経済をひとつのキー概念とするべきだと考えています。そのために、イスラーム経済について最も重要だと言われているムハンマド・バーキルッ＝サドルの『イスラーム経済論』とか『無利子銀行論』などを訳しながら研究を進めてきました。

この十数年はそれを土台に、現地調査、具体的にはシリアのアレッポのスーク（バザール、伝統的市場）の分析などを研究材料として、その周辺にある具体的な問題群、たとえばいわゆる伝統経済が庶民の経済活動にどの程度の比重を占めているのかとか、制度的にどのような特殊性を作り上げているのかとか、そうしたことを伝統的なスークという場における交渉、売買のあり方の特殊性を通じて分析しています。スーク経済のあり方は、いわゆる一物一価の売買ではなく、また、一人一人の商人が切り離されて孤立して、しかもその商人たちの間に資本の多寡によって上下の差ができてくるようなあり方ではなく、資本の多寡にかかわらず、そこに参加している全ての商人・買い手が水平的に横につながっていくような市場の特殊性を持っていますが、この実際の有り様をつかみ出してきました。こうしたやり方は、これまでの研究にはほとんどありません。こうした市場の特殊性は、そこの社会生活の特殊性にもつながっています。

個でありながら同時に複数である。このあり方は都市論にもつながっていきます。かの地には、伝統的な古い都市に見られる中

アレッポのスーク（著者撮影）

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

庭式住宅が並んでいます。中庭式の住宅というのはどこにでもみられるものですが、問題は、かの地のそれはずっと大規模に組織されていて、他からの隔絶と他への開放を同時に表現するような性格を持っているのです。その性質は中庭だけではなく、居住区のクオーターの構造にも見られます。これは個人の家のあり方、小共同体のあり方だけではなく、イスラーム的なものが保障している共同体性そのものを示唆しているように思います。

そうしたことをさまざまな角度から分析するために、例えば経済的な側面ではギルドについても考えています。ギルドとは、周知のようにある種の同業者が寄り集まって一つの自主的な小共同体を作り、そこで自由な、しかし公正を意図するような経済活動をその小単位で行なうもので、それが近代意識の萌芽につながったというようなことが言われています。ギルドのようなものが中東世界にあるのかないのかと言えば、これは中東世界にもあります。イスラームの場合、そうした機能は「市場」という単位で行なわれていると言ってよいでしょう。ギルドという小さな部分が独立してその役割を果たさなくとも市場全体がそういう役割を果たさなければならないという全体的な完結性を持っています。そういう性格もイスラーム世界に独特なものではないかと思います。

西欧の場合、集団形成は、王朝があって、諸国家が、似通っているかもしれないけれどそれぞれ違った法体系をもっていますが、イスラームの王朝の場合には国が違っても法が同じですから、国の違いが決して法的な制度の違いに簡単にはつながらない。そういうところである種の一体性が保たれ、共同体性が維持されます。つまり、国が最高の権力機構ではなく、むしろイスラーム的な考えとかイスラームの法のようなものが最高のものであって、それに国という機構・体制が宿り木のように宿っているだけです。それはいわゆる近代社会とは別な様相をしています。それがイスラームの文化・文明の特殊性で

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

あって、その特殊性を理解するにはさまざまな切り口があります。伝統的な価値観がどのような社会体制、国家意識を作り上げていったかということを調べることだけでことは済まず（これが地域の伝統的な特殊性を考察する上で一番重要なことですけれども）、それが近現代の動きの中でどのような結果を生んでいるのかという問題につながります。

世界中のどの地域も単独で自律することはできません。イスラーム世界も時代の流れに巻き込まれ、その構造のなかに位置付けられます。イスラームのシステムというのは、集中・独占というものに適合しない性質があります。時代が家内生産から工業生産となり、さらにＩＴ化されていく時代、技術が発展する中で、イスラーム世界はその本源的な部分を固守しています。そういう意味でイスラーム世界の政治・経済的な遅れというものが指摘されます。他方忘れてならないのは、時代の流れの中で、工業化された世界では人間の生活までもが工業化されますし、ＩＴ化された文化においては人間の生活までもがＩＴ化されていって、それがさまざまな文明の障害をもたらしていることです。

イスラームの価値観は、一々の単位、一々の存在者、一々の人間の固有性を絶対に売り渡さないところに真価があります。そのことが、イスラームが文明的にさまざまな特殊性を依然として持ちつづけていることにつながっています。そのために西欧世界、近代社会が示しているものには乗り遅れていて、そういうものに何らかの対処をする必要は確かにあるのですが、その反面、最低限人間に必要なものをイスラームの文明が保ちつづけているということが持つ意味は、今後特に重要になってくるのではないでしょうか。このような観方はあまりにも楽観的であると言われる方もいますが、世界の情勢を見ているとそれほど楽観的でもないと思います。そういう価値を再び見出すことができるかという問題を先進世界は課されているように思います。そうした観点に立てば、逆さまのかたちですけれども、中東・イ

SAMPLE
Shoshi Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

スラーム世界が持っている特殊性の意味には簡単に捨てがたいものがあるのです。現在の中東世界でも上層部では、集中とか権力とかを維持する機構、代理の権力、つまりあるものの代わりに他者が行使する権力というものが同一律の拡大によって極めて特殊な状況をつくりだしていて、それに個々人が冒される部分がでてきています。中東世界も上層部ではそうした代理のまずさのようなものが問題を引き起こしていますが、一皮むいていわゆる中から下、隣人、家族という小共同体における有機体性、瑞々しさといったものは現にものすごい力で存在しています。そうした力強さが、例えばイラクの戦後の動向にもあらわれていると思います。民衆にはほとんど定期的な収入などなく、先進国ならばリストラの拡大によって自殺者が増加したりするような状況ですが、そういう方向にはいかないところの力強さを簡単に侮ってはいけないのではないかと思います。

公的レヴェルの脆弱さに対しての私的レヴェルの豊かさ、それを支えているのは単なる個人の心情的なものではなく、むしろ世界観のようなものです。差異的なものを尊重し、差異性にいつも心を致して、他者に対する侵害を極力拒否する。これは例えば利子を取らないというようなことにも関係しますが、公共善が本来の意味で生き続けている。それが国家的レヴェルではなく、一番下のところにしかないところが問題なのですが、それが脈々として存在していることにムスリムはものすごい自信を持っていると思います。私的、個的なものの尊重は、いずれわれわれ日本人や西欧人がどこかで再び問い直さなければならないことだと思います。

現地生活の研究における意義

わたしは当初日本で充分に勉強する機会には恵まれませんでしたので、何も分からないときからエジ

SAMPLE
Shosh-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

プトに留学し、散々苦労して日本に帰ってきましたが、それからすぐオイルショックがありました。日本政府がアラブ諸国に対して文化交流をしなければいけないという方向に動き出したとき、その第一弾で日本文化の紹介のためにエジプトのカイロ大学に行って日本語を教えるという役割を命じられました。そろそろ自分の個人的な環境を整えて仕事をしようと思っていたところだったのですが。しかしわたしにとってこれは僥倖でした。派遣の主旨とは別に、カイロ大学に日本の研究をするための学部を開設するということになりました。そしてエジプトに二年滞在し、日本学科を開きました。その後イランでも文化交流で仕事をして欲しいという要請があり、イランでは日本の思想を教えました。

その後、国際大学に勤めることになりましたが、ここでは文部省の科学研究費もたいへん潤沢にいただき、豊富な研究資料を購入、蒐集するとともに、研究のためにシリアに赴きました。アレッポ大学では日本とアラブの文化交流センターを作っていただき、そこを拠点にして、先ほど話したように色々な研究を行なうことができたのです。エジプト、イラン、シリアの三つの地域にそれぞれ数年以上滞在したことが中東世界を理解するうえでとても役に立ちました。さまざまな文明のそれぞれの伝統と近代への向き合い方は違っていますが、それらの国々に蓄積されてきた伝統的なもの、世界観なり倫理観、ひいては組織・制度のようなものまでが、近代化の中で確かに大分姿を変えているものの、表面上は見えないだけで、一歩深く入ると脈々と流れています。その種の事柄は本には書かれていないのです。この三つの国での生活を通じて、こうしたことをリアルに体験しました。さまざまなミッションで中東世界で働いている方々と話してみると、研究者の言っていることと実際とは全然違うじゃないかという声を非常によく耳にします。このようなコメントは、表層的なところから深層的なところまでについて言われます。結局のところそれはどういう事情に由来するかと言えば、ヨーロッパ世界のオリエンタリズム

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

というものがあって、自分自身の観点からしか対象を見ていない。欧米のメンタリティーはやはり他者を対等に理解するということに不向きであると残念ながら言わざるを得ない。もちろんそこから、優れた、透徹した解釈や理解は提出されていますが、本当に対象に固有の感受性、感性、思想に則して理解しているかと言えば、そうではないのです。だからわれわれのやらなければならないことは山のようにあります。

ところで、中東・イスラーム研究は伝統的に、乱暴に括れば、欧米系のものばかりでなく、いわゆる「国学」としての現地のものがあります。この「国学」のほうは互いに言わずもがなの共通理解を持っていて、土俵を同じくして研究を進めています。ところがわれわれ外部の者にとっては歴史的な環境も違えば、伝統、常識も違っています。したがって現地のものをただそのまま訳したり移し変えたりしても日本の研究者や一般読者に通用しないところが多々あります。このごろでは現地の人々の中にも、外の世界に向けてそれに相応しいようなかたちで自文化を紹介している例がありますが、それはそれで受け手側に捉え方が任されているような手法のものが多く、隔靴掻痒（かっかそうよう）の感が拭えません。そこでわれわれ受け取り手が、主体的に相手に求めていくという態度が必要だと思います。現地の人々のディスカッションを、われわれにとって意味のあるかたちでまとめ上げていくような道が求められています。共通項のないところに、ただ論文のようなかたちで送り出しても、専門家の自己満足で終りかねません。これでは現地の文化に直に触れることのない日本の人々に、相手についての深く正確な認識を与えることにはつながりません。権威ある者のごとく「これが中東・イスラーム世界である」といった言説が大流行の時代に、それを批判的に検証、摂取する手立てがないのですから、丁寧な解説のついた価値ある著作の翻訳、優れた解題が必要だと思います。とにかく現地の香りのする研究、紹介が極めて少ない。この大

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

文明には、まだまだ教えられることが山のようにあります。認識なしの判断の域を脱するために、いまだにこれほど多くのものが取り残されていることには、少なくとも一人の研究者としてはむしろ大きな幸せを感じています。

（二〇〇四年）

＊増補新版刊行に際して文章を整理した。

主要著訳書

一九七四年　コルバン『イスラーム哲学史』（共訳・フランス語・岩波書店）
一九七五年　ナスル『イスラームの哲学者たち』（共訳・英語・岩波書店）
一九七六年　ワット『イスラーム・スペイン史』（共訳・英語・岩波書店）
一九七七年　イブン・ハズム『鳩の頸飾り』（訳・アラビア語・岩波書店）
一九七八年　カナファーニー『太陽の男たち』（訳・アラビア語〔パレスティナ小説〕・河出書房新社『現代アラブ小説全集7』所収）
一九七八年　サーレフ『北へ遷りゆく時』（訳・アラビア語〔スーダン小説〕・河出書房新社『現代アラブ小説全集8』所収）
一九八〇年　『イスラームの心』（著・中公新書）
一九八三年　『イスラーム辞典』（編著・東京堂出版）
一九八五年　ガザーリー『哲学者の意図――イスラーム哲学の基礎概念』（訳・アラビア語・岩波書店）
一九八七年　『地域研究の方法と中東学』（編著・三修社）

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

一九八八年　『イスラーム経済』（編著・三修社）
一九九〇年　『共同体論の地平』（編著・三修社）
一九九一年　『イスラームの反体制』（著・未來社）
一九九三年　バーキルッ＝サドル『イスラーム経済論』（訳・アラビア語・未知谷）
一九九四年　バーキルッ＝サドル『イスラーム哲学』（訳・アラビア語・未知谷）
一九九四年　バーキルッ＝サドル『無利子銀行論』（共訳・アラビア語・未知谷）
一九九六年　ガーバー『イスラームの国家・社会・法』（訳・英語・藤原書店）
二〇〇四年　『イスラームの構造――タウヒード・シャリーア・ウンマ』（著・書肆心水）
二〇〇四年　『イラク戦争への百年――中東民主化の条件とは何か』（編著・書肆心水）
二〇一〇年　アッ＝タバータバーイー『現代イスラーム哲学――ヒクマ存在論とは何か』（訳・アラビア語・書肆心水）
二〇一〇年　ハッラーク『イスラーム法理論の歴史――スンニー派法学入門』（訳・英語・書肆心水）

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com